

令和7年度木津川市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和8年1月26日(月)
午後 1時00分 開会
午後 2時07分 閉会
2. 場 所 木津川市役所5階 全員協議会室
3. 出席者 木津川市長 谷口 雄一
木津川市教育委員会
教 育 長 竹本 充代
教育委員 小松 信夫
教育委員 佐脇 貞憲
教育委員 皆川 麻紀
教育委員 智原 江美
事務局
企画戦略部
政 策 監 小川 良典
企 画 戦 略 部 長 茅早 祥一
企 画 戦 略 部 次 長 西村 和将
学研企画課企画広報係長 藤木 暢人
教育部
教 育 部 長 平井 浩美
教 育 部 理 事 山口 正敏
教 育 部 理 事 雑賀 孝博
教 育 部 次 長 福井 俊英
教 育 部 次 長 東村 泰嘉
教 育 部 次 長 松井 学
社 会 教 育 課 長 中島 雄介
教育総務課課長補佐 齋藤 聡美

4. 会議の要旨

1 開 会

- (1) 市長あいさつ
- (2) 教育長あいさつ

2 報告

「恭仁宮跡（山城国分寺跡）の特別史跡の指定（答申）について」

松井教育部次長兼文化財保護課長が資料に基づき説明した。

【説明】

令和7年12月19日に国の文化財審議会から「史跡恭仁宮跡（山城国分寺跡）」を特別史跡に指定する答申が出された。今後国の官報告示手続きを経て正式に決定されることになる。時期は未定。特別史跡としては全国で66件目、府内では4件目、京都市外では初の指定となる。史跡として価値を認められたことになり、より一層保存活用に向けて取り組んでいく。

2 意見交換

「部活動の地域展開について」

山口教育部理事が資料に基づき説明した。

【説明】

部活動の地域展開が議論されることとなった背景には少子化や増加する教員の負担軽減がある。スポーツ庁・文化庁による「地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議」でこの課題について議論され、令和7年5月に最終とりまとめが公表された。その中で、改革の目的として「将来にわたって生徒が継続的にスポーツ・文化芸術活動に親しむ機会を確保・充実する」とし、さらに活動の在り方、費用負担、教育的意義等についても言及されている。

木津川市の現状について。今年度市内のスポーツ・文化芸術団体、中学校教職員、児童生徒、保護者にアンケート調査を実施。検討委員会を設置し、アンケート結果や課題を整理し、市の実情に応じた部活動の地域展開についての検討を進めていきたい。

【意見交換】

佐脇委員：部活動の地域展開の議論は、はじめは教員の負担軽減のためであったと思うが、先ほどの説明の中で部活動の教育的意義という言葉があった。学校の先生と生徒の絆は授業以外に部活動などでもできると思う。担任の先生には話せなくても部活動の顧問の先生には話せるということもある。子どもたちのためには、学校に軸足を置いた上での地域とのバランスが重要であると思う。また部活動が負担であったり、やりがいであったり、教員により捉え方が違うので、その点についてもバランスを考慮したうえで進めることが必要である。

小松委員：少子化が進んでいる現状では、地域との連携を考えざるを得ないと思う。資料を見ると、細かく分析されているので、少しずつでも前向きに進めていければよいと思う。ただ、課題が多く、進めてい

くことは難しいのではないかととも思う。

アンケート結果から、地域の団体では前向きな姿勢が見られるが、部活動の教育的意義を理解して、どこまでできるのか。また保護者の不安もある。その1点だけでも大きな問題を抱えている。ゴールまで一直線とはいかない。

学校の実情をよく分析して進めていくことが必要である。

山口理事：学校では、部活動の教育的意義を大事にして活動してきた。日本全体の状況として少子化が進み、生徒数が減少するという事実を踏まえて、子どもたちの活動を保障するための取組みである。部活動の地域展開を進める中で新しいつながりや発見、体験の機会ができていけば良いと考える。課題を検討し、できることを探しながら取り組んでいきたいと考えている。

谷口市長：教員が休日の部活動に関わる時間は、平成28年までの10年で2倍になっていると説明があった。その要因は何か。またアンケート調査も様々されたようだが、子どもたちが、今の活動に満足しているのかどうか。充足しているのであれば地域展開の意義はどうなるのか。この2点についてはどう考えられるのか。

山口理事：教員が休日の部活動に関わる時間が増加した要因については表からの把握は難しい。現在は部活動における指針を作成し、活動時間の目安を設けている。生徒の部活動に対する満足度については、入部率が88%程度と非常に高く、多くの生徒が部活動に参加している。アンケート調査の中で所属する部活動が第1希望の割合は85%、気に入っている割合は13%となっており、有意義に活動していると考えている。

谷口市長：教員の負担軽減という視点があるなら、その点に関しての申し出や勤務の実態などもわかればよいと思う。また入部率が高いとのことだが、希望通りの部に入部した後、継続してみてもどう感じているかなど聞ける機会がないか。今後アンケート調査することも検討してほしい。

皆川委員：保護者としての視点から発言する。報道でも取り上げられているので、部活動の地域展開について耳にして知っていても、実際に地域に移行された場合どうなるのか、具体的な想像ができない。地域クラブになった場合の送迎や金銭的な負担なども気になる。

一方で子どもがしたいと思うことをさせたいとも思う。地域に移行しなければしたいと思うことができないのであれば、進めてほしいと思う。実際にはどのような課題が出てくるのかわからない不安や各家庭での事情もある。また勉強は苦手でも部活動で頑張っているならば、内申がよくなるという期待が持てなくなるのではないかと不安や、不登校でも部活動には参加できている場合などは、全く学校に行けなくなるのではないかと不安もある。

いろいろな不安要素はあるが、資料を見ると様々な可能性を考えられていることが理解できるので、このまま進めてもらっていいという思いと、不安な思いの両方ある。

また、部活動が得意な子ばかりではない。地域移行して強さだけを求められると、初心者だけやってみようと思うような、初めてでも入りやすい今の学校のクラブの良いところが失われないようにしてもらいたいと思う。保護者としては学校だから安心して子どもを預けられるが、地域のクラブに同じように安心して預けられるかという不安もある。

谷口市長：報道などで、京都市では学校部活動を廃止し、京都版地域クラブを設置して放課後活動を実施していく動きや、神戸市では「コベカツ」として地域クラブでの活動に移行したり、舞鶴市でも「マイカツ」という取組みをされていると聞いており、居場所づくりや部活動の在り方を検討していく流れになっているように見える。

智原委員：社会状況の変化や少子化、教員が子どもたちを指導する時間が確保できないなどの課題から部活動の地域展開についての検討は必要だと考える。世界的に見て日本だけは部活動を学校が担ってきたという歴史もある。地域のクラブで、早い時期から地域の人とつながることは、スポーツ・文化活動を続けていく上で良い経験になる。経験のない教員が指導するよりも高い技術の指導も期待できるが、指導者の質の確保について、どのように考えられるのか。

長年活動してきた方が指導することになると思うが、成長に応じた適切な指導をしなければ、怪我や体の故障につながりかねない。

勝利至上主義になると、アンケートで多かった友人との関係を構築したいという子どもたちの希望に添えない。そういった子どもたちの希望や体のことも理解される方に指導してもらえたら良いと思う。また休日は外部指導者、平日は学校の教員が指導することも想定されるが、そうになると、引継ぎや連携が必要であるが、その点についてはどのように考えられるのか。

部活動の地域展開については、自治体により様々取り組まれている。木津川市でも地域の特性を活かした活動にしていく必要がある。検討委員会を設置されるとのことだが、具体的にはどのようなことを考えているのか。

谷口市長：指導者の質の確保や地域展開後のイメージなど、先進地の事例で紹介できるものはないか。

山口理事：指導者については、保護者や生徒自身も不安に思っている。指導者は活動経験者や専門的な方が望ましいが、一方で中学生の自己肯定感や人格形成、人間関係の構築の大切さなどを理解した上で指導することが大切である。地域でそういった視点を持って活動されている方がどの程度存在するかは不明だが、そういった視点を持って

指導してもらいたいと考えている。また地域と連携・協働する中で、安心して活動できる体制づくり、制度の構築が必要であるとも考えている。学校と地域がどのように連携するか、その上で活動機会をどのように確保していくかも課題の一つである。

今後、検討委員会を設置して意見を聞き、アンケート調査結果も踏まえて、本市ならではの人材確保や制度活用を検討したい。市域は広いが、それぞれの地域の実情に応じて学校、地域、行政が連携を取りながら進めていきたい。

谷口市長：部活動の地域展開には全国的に少子化が背景にある。本市はこれまで人口が増加傾向であったが、現在は減少に転じており、他市町より遅れてその課題に向き合う地域である。先進地では純粋なスポーツ競技や技術を高めるとのことだけではなく、居場所づくりや、ユニークなクラブ活動を展開されているところもある。本市ならではのアイデアはあるのか。

竹本教育長：木津川市ならではのアイデアについては今後検討していく中で考えを出し合いたい。部活動の教育的意義、学校がこれまで担ってきた役割も大切にしていかなければならない。今後生徒数は減少傾向であり、それに伴って学校の部活動数も減少し、希望する種目も減少していくことになり、部活動の在り方を考える時期になってきている。今後の状況を考えると地域の団体の力を借りなければ活動できないと考えている。

市内には5つの中学校区があり、それぞれ状況が違うので、できることから進めていきたい。市域が広く学校間での共同活動を進めると、移動などが課題になる。保護者の意見も聞く必要がある。

子どもたちが部活動から得られる体験は大切なものであり、社会の流れの中で、より良い在り方を考えていく必要がある。

アンケート調査の結果、受入れに前向きな市内団体もあるが、週末だけの地域移行の場合、平日とのつながりはどうするのかという課題もある。課題は多いが、子どもたちの活動機会を確保し増やしていくように、また子どもたちにとって、どのようにすれば最も良いのか、考えていきたい。

谷口市長：市域が広いので、移動など負担が生じる。経済状況により子どもたちの活動状況が左右されないようにしたい。国の推進する方針なども含めて活動イメージなど説明願いたい。

山口理事：現在は検討委員会の設置に向けて部内で検討を進めている。すべてを一斉に移行することは難しいと考えるため、モデル事業に取り組み、進める中で課題や成果、地域展開の意義が表面化してくるので、その点について検証しながら、地域クラブでの活動を広げていきたい。順調に進められるかどうかの課題は多いが、着実に進めていきたい。

谷口市長：本市においてもよい形で進めていくにはどういった方向性がよいか意見を聞きたい。

皆川委員：良い意味で地域の方の力を借り、地域の方も一緒に子どもを育てるという理念があるが、それが実現できればいいと思う。

小松委員：難しい問題である。今は学校の部活動として成立しているが、今後難しくなっていく。今のうちに学校の部活動を地域団体が受け入れていく体制を作っていくことになると思うが、当面、毎日の活動は学校でしていかななくてはならない。その中で徐々に地域が入っていき、教育的意義や考え方など共有できるようにすることだけでも課題がある。活動場所、時間、移動手段なども課題になる。学校と地域の活動を融合させ、共に子どもを育てていく思いを共有していきたい。

谷口市長：切れ目ない活動のためには、方向性は決まったとしても、最初の段階ではお互いを馴染ませていく。その中で調整しながら進めていくことが必要である。

佐脇委員：現在も野球やサッカー、芸術活動など、学校以外で活動している生徒もいる。そういった現状の中で、部活動については、学校をベースに地域の方を受け入れていく方法が円滑に進むのではないかと思う。

智原委員：地域と学校で、子どもの活動を展開できることが望ましい。大変難しいことだとは思いますが検討を進めてもらいたい。

谷口市長：現在は学校の部活動が成立しているということで、事前に聞いているところでは、5中学校ではそれぞれ少なくとも10、多ければ20程度の部活動があり、この点だけ見れば充足していると言える。一方、多様なニーズに対応するために必要なことが今回の動きであると思う。国においても指針が示されているが、子どもたちにとって良い形で選択肢が増えることが望ましい。先行自治体の成功例、失敗例を研究したうえで、本市に合った地域展開になればよいと考える。

竹本教育長：地域と学校が一緒に子どもを育てるという概念を頭に置いて検討を進めていく必要がある。実際のイメージがわかりにくいですが、スタートした事業の検証をされている先進地の事例を確認しながら進めたい。地域展開を進めることは、教員の負担軽減につながることも事実である。そのことが結局は子どもたちの指導の時間、子どもたちに向き合う時間を確保することになり、子どもたちのためになる。子どもを中心に据えて、より良い形で進めていきたい。

谷口市長：様々な話があったが、丁寧に進めることが大切であり、子どもにとってより良い活動になるよう検討を進めてもらいたい。

3 閉 会